ごあいさつ

「さいたまトリエンナーレ2016」は、127万人もの人々が生活するさいたま市に、世界に開かれた創造と交流の現場をつくりだすことを目指す国際芸術祭です。テーマは「未来の発見！」。アートを鑑賞するだけでなく、共につくる、参加する芸術祭です。まちの成り立ちや知られざる自然、土地の歴史など、生活都市ならではの魅力が見える、市内のさまざまな場所を会場として開催いたしました。

「HomeBase Project SAITAMA 2016」では、昨年のプレイベントに続き、本開催のアートプロジェクトのひとつとして、国内外8名のアーティストたちが約1か月間、さいたま市岩槻区の老舗人形店の社員寮に滞在し、地域の歴史、文化、環境に触れ、人々との出会いの中で、「Home」をテーマとした創作活動を行いました。

本事業開催・運営にあたり、共催をいただいたHomeBase Project、会場をご提供いただきました株式会社東玉、サポートをしていただいた多くの市民ボランティアの皆様、その他、多大なるご協力、ご支援をいただきました関係各位に深く感謝をし、心から御礼を申し上げます。

さいたまトリエンナーレ実行委員会

Foreword

Saitama Triennale 2016 has been held in fall 2016 as one of the core projects under this ordinance and a symbol of the creation of Saitama City of Culture and Art. Set in Saitama City, home to around 1.27 million residents, this event was more than just an art festival. The theme for this event was “Envisioning the Future!”. Our wish was to make this event a celebration of our citizens’ imaginations, where residents collaborate with artists in a search for the future. “HomeBase Project SAITAMA 2016” was held at Iwatsuki-ward, as one of the art projects of Saitama Triennale 2016, following the HB pre-event taking place the year before. Eight international artists lived together at the dormitory of Tougyoku Corporation, lead a new cultural discourse, met the local residents, researched the regional history, and created site-specific art works around the notion of “home.”

We would like to express our deep gratitude to the HomeBase Project, Tougyoku Corporation, volunteers, and all to who supported this event.

Saitama Triennale Executive Committee

目次 Contents

1… ご挨拶 ―さいたまトリエンナーレ実行委員会より
Greeting from the Saitama Triennale Executive Committee

4… プロジェクトディレクターコメント
Introduction from the Program Director

6… アーティストの受入れとホーム ―ひとつの声明文として / ホームベース・プロジェクトさいたま
On Artistic Hosting & Home -A Manifest / HB Project SAITAMA by HB Team

16… インタビュー #1 東玉社員寮について
Interview#1 “About the dormitory of Tougyoku Corporation”

18… Room#1 飯島浩二
Koji IIJIMA

22… Room#2 アナット・リトウィン
Anat LITWIN

26… Room#3 テクラ・ボーヴェン
Thekla BOVEN

30… Room#4 マシャ・ズスマン & ヴァレリィ・ボロチン
Masha ZUSMAN & Valery BOLOTIN

34… Room#5 平野拓也
Takuya HIRANO

38… Room#6 マルティンカ・ボブリーコヴァー & オスカー・デ・カルメン
Martinka BOBRIKOVA & Oscar DE CARMEN

42… アーティスト滞在記録
Schedule of activities

46… インタビュー #2 地域の協力者コメント
Interview #2 “Comments from local collaborators”

48… オープンハウスの記録
About HB Open House

50… ワークショップの記録 埼玉近代美術館にて
The Workshops at MOMAS

HomeBase Project SAITAMA 2016 開催によせて

2015年のプレイベントの開催に続き、「HomeBase Project（ホームベース・プロジェクト。以下「HB」）が、岩槻に戻ってきた。HBとは、アーティストのアナット・リトウィンにより、2006年に創設された移動型国際アーティスト・イン・レジデンス・プロジェクト（AIR）（※）である。現代の社会状況の変化により空き家となった場所をアーティストの「家」と見立て一定期間拠点とし、さまざまな活動を行うことで、日常生活におけるアーティスト、芸術の役割を発展させることを目的としている。レンガ倉庫、空きビル、歴史的建造物などを舞台に、ニューヨーク、ベルリン、エルサレム、そして昨年のさいたま市と、各開催国・地域のアーティスト、キュレーターとプロジェクトチームを編成し、過去7回のプロジェクトを展開してきた。

HomeBase Project SAITAMA 2016 では、昨年のプレイベントに引き続き、株式会社東玉の社員寮を "Home" として実施した。人形づくりにたずさわる人々が、日々を暮らした記憶の宿る場所である。国や背景の異なる8名のアーティストが、地域の歴史、文化、環境に触れ、約1ヶ月間の共同生活をしながら創作活動、成果発表である「オープンハウス」を行った。一定の拠点をもたず、世界を旅するインディペンデントな活動体であるHBは、本トリエンナーレの中に流動性や偶然性をもたらす場を提示した。「Home／ホーム」、すなわち私たちが暮らす場とは何か。家族とは、人間とは何かをアーティストが問い、都市が抱える課題、生活環境、建物の歴史を読み解き、地域住民とのコミュニケーションを経て可視化し、共有する。そこには、人間、そして社会という流動的な存在を肯定する力が宿っていた。

昨年出会った多くの人々との再会は、さらなる友情を育み、またリサーチ、作品制作のプロセスに関わっていただくことにより、多くの発見と、アーティスト・イン・レジデンスをこの岩槻で行なう意義への理解を深めていただいたと思っている。生活者としてのアーティストを受け入れていただき、またこの地で生きることの意義について共に考えた時間の結実が、私たちひとりひとりが未来を描くための創造の種となることを心から願っている。

さいたまトリエンナーレ 2016
プロジェクトディレクター　日沼禎子

※アーティストが、ある土地に滞在し、作品の制作やリサーチ活動を行なうこと、またそれらの活動を支援する制度を指す。

For HomeBase Project SAITAMA 2016

Continuing from the pre-event held in 2015, HomeBase Project (hereinafter referred to as HB) has returned to Iwatsuki. HB is a not-for-profit, international nomadic artist-in-residency (※) project (AIR) founded by artist Anat Litwin in New York in 2006. With the aim of expanding the role of art and the presence of artists in everyday life, sites located in urban areas that have become vacant due to changing social conditions are selected as temporary "Homes" for artists, who go on to develop numerous activities over a designated time period. Utilizing brick warehouses, vacant buildings and historical sites as venues, the HB event, which has been held seven times to date in NYC, Berlin, Jerusalem, and in Saitama City last year, involves artists from host countries and the local area, curators and a project team.

As with the pre-event of the preceding year, HB Project SAITAMA 2016 was held at the dormitory of Tougyoku Corporation, a building that came to serve as a "Home." It is a place suffused with the memories of those who spent many days there while involved in Hina doll manufacturing. A group of eight artists from different countries and backgrounds lived together on site for approximately one month, encountering the history and culture of the region and the local environment that inspired them to create site-specific art works. To conclude the pre-event, the dormitory was opened to the public as an "open house."

As an independent organization that travels the world without a fixed base of activity, HB proposed a site that brought mobility and contingency to the Triennale. What does "Home," i.e. the place where we reside, mean? Questioning what it is to be human and the meaning of "family," the artists examined issues relating to the city, people's living environment and the history of the building, visualizing and sharing their findings through communication with local residents. And the expressive forms that resulted from their investigations contained a power affirming the fluid nature of human existence and society.

Friendships with many of the people encountered in the pre-event have been further deepened in HB Project SAITAMA 2016, and I believe that it is due to their kind involvement throughout the research and creative process that a wealth of discoveries were made and a greater understanding of the significance of holding an artist-in-residency project in Iwatsuki was achieved. It is my sincere wish that the fruits borne from the residents' willingness to accept artists as fellow inhabitants, and the time spent thinking together about the significance of living in this place will become seeds of creativity that help each one of us to envision the future.

Teiko Hinuma
Project Director, Saitama Triennale 2016

※ Artists who stay in a certain place to create artwork or undertake research, or systems that support such activities.

アーティストの受入れとホーム
―ひとつの声明文として

ホームベース・プロジェクトさいたま

アナット・リトウィン（HB創設者）
ニッキ・ヘンドリックス（共同プロデューサー）
ホームベース・チーム一同

著名な地理学者、人類学者、そして都市計画思想家として知られるデヴィッド・W・ハーヴェイはその論証『反乱する都市―資本のアーバナイゼーションと都市の再創造』において次のように述べている。「資本主義的な都市空間形成は社会的、政治的、そして生活に適する場所としての都市を破壊する傾向にある。（中略）アーバナイゼーションは、都市住民（あるいは、その公共空間や公共物産の影なる姿）の生産、そして私益による、永久の盗用と破壊を意味する。」

アーティストたちは歴史的に、ディセント（反対派）の声の担い手であり、既成の秩序に対し異議を唱えつつも、将来に向けて創造力に溢れるヴィジョンを提供してきた。世界的な都市の発展を背景とした非建設的な民営化への過程に対する文化的ニーズは、それらに対する反発である。個人の間や異文化間における自由な文化交流と、都市生活の芸術的な読み替えを可能にする、力強い戦略が求められている。

アーティスト・イン・レジデンス・プログラムは、アーティストが異なるコミュニティーにおいてその活動を可能とさせるプラットホームであり、多様な文化交流や実験、プロセスなどを重要視するものである。
ホームベース・プロジェクト（HB）は、「ホーム」という観念を探求するインディペンデントの移動（ノマド）型の、アーティスト主導によるAIRおよびリサーチプログラムである。ニューヨークから始まり、ベルリン、エルサレム、さいたま市に至るまで、さまざまな都市において、多様なアーティスト・コミュニティー、近隣住民、活動家、共同体などと協力しながら、地域に根ざした仮設的な「ホーム」をつくることを目的に活動を行ってきた。
私たちのプロジェクトは、社会学者及び哲学者であるアンリ・ルフェーヴルが、著書『都市への権利』（1968年）において初めて提唱した、新たな社会と文化的規範（パラダイム）を築くことが都市におけるアーティストの役割であるという考えを実証し、探求しながら、主流を占める資本主義の産物に対して対峙し、微力ながらも破壊する活動であった。私たちが目指すのは、コンテンポラリー・アートを通して、それぞれの世代、ジェンダー、文化、階級の間にあるギャップをつなぎながら、相関する人間性の根源を探るため、人々を解き放ち、誰もが帰る場所「ホーム」をつくりだすことである。

ホームベース・さいたまは、さいたまトリエンナーレの一部として、2年にわたるプロセスを経て岩槻の東玉社員寮を拠点に開催された。2015年のプレイベント、そして2016年のメインイベントでは、ビジュアルアーティスト、都市デザイナー、グラフィックデザイナーなどさまざまな表現を行う、いずれもインディペンデントかつアーティスト・イニシアチヴの文化をリードする優れたアーティストたちの参加を得て実施された。1ヶ月にわたる活発な滞在プログラムの後、私たちは寮のドアを開け一般に公開し、展覧会、交流プログラムを行い、さまざまな体験や見解を通して「ホーム」の意味を追求した。

HB Rooms　ホームベース・ルーム（展示）

《Fitting in（納まる）》と名付けられたマシャ・ズスマンとヴァレリィ・ボロチンによる作品は、「男－女－家」というホームにまつわる根源的な方程式に意味を込めた、親密なコラボレーションによる写真シリーズである。この場合の「ホーム」とは、日本の伝統に則った和室であり、身体の尺度に合わせた３尺×６尺の畳が敷かれた空間である。畳部屋で遊ぶように模様替えし、一枚の畳を抜くことによって生まれた空間に幻想風景、例えば金魚が戯れる小池、竹林、キャベツ畑までをつくり出した。自然と文化、幻想と日常生活との間に、怪しげで美しく、緊張感のある魅惑的な空間をつくることで、生活の中における生と死、属性、愛、喪失などに関わる存在意義を問いかけている。このシリーズは、この世界のすべてを「ホーム」と呼ばれる４つの壁に囲まれた自分自身の内面にこそ、見つけることができるのだということを想起させる。

アーティスト・デュオとして活躍するマルティンカ・ボブリーコヴァーとオスカー・デ・カルメンによるシリーズ作品は、家庭と都市環境との間を結びつけ、既存の消費システム、社会的秩序、帰属意識に問いかける。
《対峙 #1》は通りがかりの人に飲料を提供する、日本の道路では無数に見ることができる、ごく普通の自動販売機である。自動販売機に近づき代金を入れると、消費者はこの自動販売機に突如、「あなたは幸せですか？」と問いかけられる。
自動販売機は飲料の提供を拒否し、入れられた代金を返却し、投げかけた質問はそのままに、「即答」という幸福の権利を置き去りに、ぐずぐずと長引かせる。このことこそが、日本の多忙な現代生活の中で、長く忘れ去られている権利であるかのように。
《対峙 #2》は自動販売機を補完する役割にある。自動販売機は従来、都市における現代生活を満たし、補給するために製品を提供するのに対し、「ハンズフリー」の掃除機は、人間が出したゴミを吸い込むことで、家庭内での人的労働を代行するように機能している。
畳部屋をあちこち動きまわる、赤と青に点滅するライトが付いた円形のシンプルな機械装置は、壁などに衝突すると自動的に「私は幸せです。」と、冷静な声を繰り返す。冗談のように聞こえるであろうこの言葉は、「過労死」という、働き過ぎによる重荷とストレスによる死という日本の社会現象を表す一方で、社会の「生産性」に対する反論とも見てとることができる。

飯島浩二の作品《Rolling Home Base Home》は、記念碑的な野外彫刻であり、パフォーマンスのための作品でもある。移動性、移住、そして難民が必要とするものへの問題に触れた。必要最低限な生活を可能にする、完璧な小さく赤い家には大きな鉄製の車輪が備え付けられ、バギーカーのエンジンが搭載されており、安定走行の可能性が示されている。パフォーマンスでは、大きなエンジン音をたてながら、さいたま市の路上で作品を走らせ、素晴らしい安定感と移動性、そしてドライバー席に座るアーティスト自身の存在も強く印象付けた。ホームベース・プロジェクト創立10周年を記念するモニュメントとしても作られたこの彫刻作品は、HB のシンボル・ロゴを連想させ、家路、あるいは世界の中で「ホーム」を求めるという根源的な問いを表している。

テクラ・ボーヴェンによる《スタンド・アップ》と題される作品は、さまざまなメディ

アを越境し、伝統と現代との間にある新しい文化の立ち位置を意識させるものである。彼女は、お内裏様、そして平安時代の最上衣である唐衣裳（いわゆる十二単）を身に纏うお雛様、三人官女、お囃子などが飾られる、毎年３月３日に行われる雛祭にインスパイアされ、伝統的な家の構造やジェンダーに束縛されない、自由気ままな新世代のための環境をつくり出した。彼女の部屋に入ると、外の景色を全望するために備え付けられた大きな窓と淡い濃淡で塗られた壁の空間によって、私たちは鎮静の雰囲気に包まれる。部屋の中心には、ボーヴェンが着物の布地を重ね合わせて制作した、美しい雛人形を思わせる現代風の一人掛けソファが置かれており、人々はそこに座り、瞑想と風景の鑑賞へと誘われていく。そして席を離れた（「スタンド・アップ」した）時に観客は新たな活力や視点が与えられ、自立した自己の存在に気付き、満たされた気持ちを味わうだろう。

平野拓也のインスタレーションは《ロック，ムーン，アーカイブセンター》という。直訳すると、これは「岩槻」（岩・月の読みがなをあてた）の意になる。ホームベース・さいたまで体験したことを多岐にわたり記録するアクティブなアーカイブであり、オープンハウス中に公開された。自ら撮影した写真やドローイングを通して各アーティストを紹介し、また、創作過程、「ホーム」の場所、表現にとって不可欠な多くの交流、出会いの瞬間を記録した。これらのアーカイブによって、訪れた人々が「共有した生活」や会場の変化、アート作品の創造や貴重な体験を垣間見ることができた。

《テーブル・ランド（台地）》は私がつくった遊び心溢れるアーカイブ・インスタレーションであり、長い家路への足跡を辿るものである。この卓上ゲームには、これまでHBが訪れた４都市の地図の概略、拠点となった７つのビルのミニチュア模型、各プロジェクトに参加した130人ものアーティストの名前が記されたカード、コマが用意されている。観客は私と一緒にゲームをすることによって、ニューヨーク（HB Ⅰ）からさいたま市（HB Ⅶ）まで旅をし、道中にさまざまなイメージ、情報、質問などが書かれたカードを引きながら、文化的な文脈や芸術的成果を発見することができる。このゲームの中で最も大事なことは、参加者が自らの「ホーム」の体験を取り入れながら、アイデンティティーをめぐる問い、議論を遊びながら共有し、将来のアートプロジェクトのあり方を探るものである。

上述した作品の美しさ以上に、ホームベースさいたまはそれぞれの部屋の領域をはるかに超え、滞在制作中およびオープンハウス、HBフェスティバルのみならず、開催前後もあわせ、数え切れないほど多くの相互の交流を生み出した。この場を借りて、この上ないおもてなし、インスピレーション、プロジェクト実現のための共同と協力をいただいた、岩槻の地域の方々ならびにさいたま市の関係者に対し、心から御礼申し上げる。また、素晴らしいパートナーシップ、支援を行っていただいたさいたまトリエンナーレおよびトリエンナーレチーム、そして何よりこの魔法を共に実現させた参加アーティストたちに深謝の意を表す。

さいたま市において共に植えた種が、今後も我々の心の中に育ち、そして未来の文化、芸術の育成へとつながることを願ってやまない。

On Artistic Hosting & Home
— A Manifest

/ HB Project SAITAMA

Anat LITWIN (Artistic Director, Founder of HB) &
Nikki HENDRIKX (HB Co-Producer)
HB Team

Renowned Geographer, Anthropologist and Urban thinker, David W. Harvey, states in his essay titled 'Rebel Cities: From the Right to the City to the Urban Revolution' that "Capitalist urbanization tends to destroy the city as a social, political and livable commons...Urbanization is about the production of an urban commons (or its shadow-form of public spaces and public goods) and its perpetual appropriation and destruction by private interests."

Artists have historically been leaders of voices of dissent - questioning the established order while offering new creative visions of the future. On the background of worldwide urban growth and as a response to destructive privatization processes, one of the cultural needs that arises now is that of a counter reaction - finding vital artistic strategies, practices and platforms which can restore and nourish free interpersonal and intercultural communal exchanges and an over all artistic re-appropriation of urban life.

Art Residency programs are cultural platforms which allow the artist to explore her practice within another community, often emphasizing the importance of a multi-layered cultural exchange and the importance of experimentation and process over product. The HomeBase Project (HB), an independent, nomadic, artist-run residency and research program exploring the notion of "home", is committed to creating temporary community-based cultural "homes" in different cities in the world, in collaboration with diverse communities of artists, residents, activists, partners and municipalities - from NYC to Berlin to Jerusalem and Saitama. Driven by the quest to challenge the role of the artist in setting new social and cultural paradigms while demonstrating the right to the city - an idea first proposed by sociologist and philosopher Henri Lefebvre in his 1968 book Le Droit à la ville - the HB project unfolds as a subtle subversive artistic movement against the mainstream capitalist grain. We aim to create liberating spaces which bring one back "home" to core human roots of interconnectedness while bridging gaps between generations, genders, cultures and classes through contemporary art.

HomeBase Project SAITAMA took place at the Tougyoku dormitory in Iwatsuki as part of the Saitama Triennale in a two year phase process - as a pre event in 2015 and as the main event in 2016. This year, marking a decade to the HB Project, we hosted a fantastic group of artists from various media including visual artists, urban designers and graphic designers, all who are active leaders of independent cultural and artistic initiatives. We engaged in a month long process of reflecting on the meaning of home and discussing practices of artistic hosting while parallelly creating individual site-specific artwork throughout the rooms of the building.

HB Rooms

Masha Zusman and Valery Bolotin work (Room#4) titled "fitting in" is an intimate collaborative photographic series operating within an essential equation: man - woman - home. In this case 'home' being set in the traditional Japanese tatami room made by an arrangement of straw mats formed to human scale (approx 0.88m by 1.76m). By reconfiguring the tatami room setting and playing within it - removing one tatami mat at a time and substituting it with a different fantastic setting, from a carp pond to a Bamboo forest, to a cabbage garden and beyond. The couple succeeds in seizing local life in a range of archetypes, echoing existential questions regarding life, death, belonging, love, loss, nature and culture, in an eerie yet beautifully mesmerizing tension. This series reminds us that sometime the entire world can fit in internally and can be experienced within the confinements of one's own four walls called home.

The work of artistic duo Martinka Bobrikova and Oscar de Carmen (Room#6) is a series of interventions which link between the domestic and the urban setting, questioning existing consumer systems and social orders in both. "Confrontational #1' is a typical vending machine, one of thousands seen on the streets in Japan providing drinks to busy passersby. When approaching the machine and activating it to buy drinks the consumer is startled with a question poised by the machine literally asking "are you happy?". Refusing to provide the product, the machine then returns the coins to the customer as change, leaving the question lingering with no "quick fix", provoking further thought about the right to pursue happiness - a right that seems long forgotten in busy contemporary life in Japan; 'Confrontational #2' is complementary to the vending machine - while the vending machine originally disposes products to fulfill and refuel contemporary life needs within the urban setting the "hand free" vacuum machine functions to absorb human excess and debris, replacing human labor in the domestic arena. This small round technological gadget with red and blue shining lights roams hectically in the tatami room, each time it bangs into one of the walls it reacts with an automatic claim "I am happy" expressed in a frantic yet synthetic self contained voice

in repeat. What seems as a joke speaks about a deadly matter. Karoushi, a Japanese word meaning death from heavy load and stress of overwork is a phenomenon in Japanese society and elsewhere, reflecting on the destructive expectations for “productivity” and labour.

Koji Iijima's work “Rolling HomeBase Home” (Room#1) is both a outdoors monumental sculpture and a performance piece linked to issues of mobility, migration and the need for refugee. A perfect small red miniature house, functioning as the smallest possible living unit, is braced in a large metal wheel and based on an engine of a buggy car suggesting the possibility of constant movement. Performing with the piece the artist activates the loud engine and rides the sculpture on the streets of Saitama, confronting the public with the stunning statement of stability and nomadism while also emphasizing the role of the artist on the driver's seat. Created as a symbolic gesture to the HomeBase Project on its tenth anniversary, the sculpture resembles the symbol / logo of the project while relating to the journey home and the underlying quest of finding home.

Boven’s piece titled "stand-up" (Room#3) crosses boundaries of medias to convey a new stance and awareness between tradition and contemporary culture. Inspired by the Hina doll culture and tradition celebrated each year on March 3rd as part of a national holiday during which parents buy for a girl by her first Hinamatsuri set of ornamental dolls (hina-ningyō) linked with the quest of finding a good spouse for the daughter. The full set represents the Emperor, Empress, attendants, and musicians in traditional court dress of the Heian period, with the Empress dressed in “junihitoe”, a twelve-layered ceremonial robe, the royal couple version includes only the Emperor and Empress. Boven created a site-specific environment for a new independent generation, free of traditional family structures and gender rolls. Entering the Room one is encountered by a soothing atmosphere due to a large window which has been installed in the room overviewing the garden, and due to the enveloping walls which have been painted in light gradation tones. In the centre of the room is a modern hand made royal sofa chair, which Boven created in layers of Kimono fabrics similar to the fabric used for the Hina doll aesthetic. The sofa invites viewers to sit, meditate, view their surroundings, and then to ‘stand up’ and leave the site empowered, with new clarity and insight, celebrating one self as a full, self contained, independent being.

Takuya Hirano’s installation (Room#5) titled “Rock, Moon, Archive Center” - a translation of the meaning of 'Iwatsuki' - functioned as an active archive during the open house, capturing the many moments experienced at HB Saitama. Through photographs and drawings Takuya captured each of the artists, while also preserving the many exchanges and encounters through which the creative process, discovery of place and creation of home and community has taken place. The archive allowed the visitors to see the “life shared together” as the centre of the transformation of site and as central to the experience and creation of the artworks.

“Tableland” (Room#2) is a playful archive installation that I have created as a way of tracing a decade long journey home. The game is built as a game board model containing lightweight miniature models of the seven buildings / homes which HB project inhabited, outlines of maps and key features of the four cities it visited, names of the 130 artists that took part in the project and a set of playing cards and player cones. The viewers were invited to join me in a game, taking on a journey from HB I in NYC to HB VII in Saitama, discovering the cultural context and artistic outcomes along the way through the playing cards which contain images, information and questions. Through these playful sessions visitors brought in their own experience of home and shared suggestions considering future models of artistic hosting, transforming the experience into a playful discussion around questions of identity.

Despite the beauty of each of these creations, HB Saitama project as a whole is much larger than the sum of it’s rooms. It is fueled by endless interactions - during the residency and open house festival, but also much before and long after.
It is here that we wish to thank the people of Iwatsuki for incredible hospitality, for bringing in inspiration and for collaborating with us on the many aspects of the project, and to the city of Saitama for welcoming us. We thank the Saitama Triennale and Triennale team for incredible partnership, support and commitment along the way, and we thank the artists for making magic happen.

We hope that what we have planted together in Saitama will continue to grow on - in hearts, minds and in future cultural/artistic endeavours.

東玉社員寮について

2015年のプレイベントから今年まで、2年にわたり拠点となった「東玉社員寮」。この建物自体がHBにとって重要な要素となった。たんすの奥や物置きには、古い本やボードゲーム、様々な木彫りの人形や人形の小道具が残されていた。また、まるで時が止まっているかのように台所には1990年のカレンダーが貼ったままになっており、アーティストたちは建物に残されていたものや歴史の一端に触れ、インスピレーションを受けながら作品を制作した。プロジェクト終了後、株式会社東玉の6代目の社長・戸塚隆氏から、東玉の歴史、建物の背景と、HBを通して感じたことなどお話を伺った。

The dormitory of Tougyoku Corporation has been the base of our project over the last two years since the pre-event in 2015. The building itself became an important element in the HB project. Still containing old books and board games, wooden dolls and their accessories in the chests and storage spaces, as well as a calendar from the year 1990 that had been left on the wall, it was a place where time seemed to have stopped, and the history and relics of the building inspired the artists as they developed their projects. At the end of HB Project SAITAMA, we interviewed the sixth president of Tougyoku Corporation, Mr. Takashi Totsuka, about the history of Tougyoku, the background of the building, and his thoughts about the HB project throughout its realization.

人形のまち「岩槻」・株式会社東玉
岩槻は日光東照宮造営の際に全国から様々な職人が集まった。その中にいた京都の仏師が岩槻で人形作りをはじめたと言われ、現在、岩槻では150軒余りの人形工房と50店の卸小売店舗がひしめいている。
株式会社東玉は、江戸時代に岩槻藩のお殿様から「東玉」の作号を賜り、現在は6代目戸塚隆氏が引き継ぎ、今日に至る。

City of Dolls / Iwatsuki Tougyoku Corporation
Iwatsuki is where craftsmen from all over Japan gathered for the construction of Toshogu Shrine in Nikko. It is said that one of them, a sculptor of Buddhist statues, was the first to initiate the doll-making tradition in Iwatsuki. Today, over 150 doll-making studios and about 50 wholesale and retail stores are located in the district. Receiving its name directly from the Lord of Iwatsuki Domain during the Edo period, Tougyoku Corporation. is now in its sixth generation, and is currently led by Mr. Takashi Totsuka.

——この寮はいつ頃建てられたのでしょうか？

昭和45年（1970）です。株式会社東玉の本社ビル（駅前のビル）の建設とほとんど時を同じくして建設されました。当時、岩槻は人手不足でした。人形の産業も景気が良く、どこも忙しかったのです。そこで、秋田出身の社員が、地元の農家や学校にも声をかけ、若い働き手を募集しました。人形店の繁忙期はちょうど12月から4月中旬までなので、東北の農家の男性が出荷などの手伝いをするにはちょうど良く、多い時では6室しかないこの寮に8人ほどが滞在していました。現在は、遠方の営業所の社員の利用や、お取引先の会社のご子息が修行のために数年滞在することもあります。

——ホームベース・プロジェクトを2年間開催することで、何か変わったことがあれば教えてください。

昨年のアーティストのひとりが、人形の使命を考え、国際社会においての役割と可能性を見出し、作品として発表してくれたことが印象に残っています。今後、国際社会における「メッセンジャー・ドール」（※）としての人形の使命の新たな可能性を考えていきたいと思っています。
アーティストたちからは、人形作りなどにおいて固定観念にとらわれず、発想を豊かにすることの重要性を学びました。

——東玉社員寮は、今後どのように活用されるか決まっていらっしゃいますか？

現在のところ決まっておりません（2016年12月時点）。今後も、地域社会のために、この場所を有効活用できればと思っております。

——When was this company dormitory built?

It was built in 1970 around the same time as the main building of Tougyoku Corporation. (located in front of Iwatsuki Station). At that time, there was a labor shortage in Iwatsuki. The Hina doll industry was prospering, so every company was very busy. Around this time, an employee from Akita approached local schools and family farms to see if any help was needed, then went to recruit young workers. The busiest period for the Hina doll industry runs from December to mid-April, and this was good timing for farmers from the Tohoku area who came to help with shipping the Hina dolls. At peak times, there were as many as eight people living in this dormitory despite there being only six rooms. Today, employees from faraway branch offices or the sons of client companies sometimes stay there for some years while undertaking training.

——Were any changes seen over the two-year period of the HB project?

I was impressed by the work of an artist last year who, after considering what role Hina dolls play in modern society, tried to elicit a new mission for them from the people he interviewed, and went on to present possibilities for new roles in an international context. I intend to think about new international possibilities for Hina dolls, taking inspiration from the Messenger Doll project (※).
The participating artists taught me the importance of broadening one's ideas without adhering to stereotypes about Hina dolls and related issues.

——Have you decided how will you use The dormitory of Tougyoku Corporation from now on?

We haven't decided yet about that. (as of December, 2016)
But we would like to continue to make effective use of the building for the benefit of the local community.

※ Artists who stay in a certain place to create artwork or undertake research, or systems that support such activities.